No.（55）令和３年度　地域と共働した博物館創造活動支援事業成果報告書

<table>
<tr><td>事業名称</td><td colspan="4">ちくごアートファーム計画 2021　はたらくアート</td></tr>
<tr><td>実行委員会</td><td colspan="4">ちくごアートファーム計画実行委員会</td></tr>
<tr><td rowspan="4">中 核 館</td><td colspan="4">福岡県立美術館</td></tr>
<tr><td>住所</td><td colspan="3">〒810-0001　福岡県福岡市中央区天神 5-2-1</td></tr>
<tr><td>TEL</td><td>092-715-3551</td><td>FAX</td><td>092-715-3552</td></tr>
<tr><td>ホームページ</td><td colspan="3">https://fukuoka-kenbi.jp/</td></tr>
<tr><td>構成団体</td><td colspan="4">福岡県、福岡県教育委員会、筑後市、筑後市教育委員会、NPO 法人芸術の森デザイン会議、ちくご JR 芸術の郷事業団（九州芸文館指定管理者）</td></tr>
<tr><td>事業開始時点の課題分析</td><td colspan="4">現状、福岡県立美術館においては、福岡県の文化芸術の発展、振興のため、地域住民の参画を伴った移動美術館展の開催を県内各地で行うなど、県内全域を対象とした取組を行ってきた。
しかしながら、福岡県における美術館施設はそのほとんどが福岡県北部（福岡・北九州・筑豊エリア）に集中しており、これまで福岡県南部（筑後エリア）の住民が地元で一流の芸術文化に触れる機会は少なかった。その筑後エリアには、棚田をはじめとした豊かな自然環境、木工や絣などの伝統工芸、橋梁や工場群の近代化遺産など、数々の地域資源を携える一方、住民の実感として都市部と比較して、「地元には何も無い」という消極的な声も多く聞かれているところである。
このような状況の中で、平成 25 年 4 月、筑後エリア住民の文化交流の場として福岡県によって芸術文化交流施設「九州芸文館」が開館した。基本的には指定管理者が運営する貸館施設で、開館以来、講座・教室・制作発表の場として順調に活用されているが、個人の趣味・教養的な段階に留まっている。これを、筑後エリアの地域特色を活かした多面的な文化芸術の醸成の段階にまで高めるため、地域住民が一流の芸術文化に触れる機会を提供し、同館を拠点に専門性の高い企画をより積極的に行うことで、地域住民の地元に対する誇りや文化芸術活動への主体性を促進する必要がある。
以上の問題意識から九州芸文館を拠点に『ちくごアートファーム計画』（H26-28 年度／以下 CAF）を立ち上げ、住民参加型の現代アート展を継続的に実施しながら文化土壌の醸成に取り組み、続く『CHIKUGO ART POT』（H29-30 年度／以下 CAP）においては館外との連携を強化し、文化芸術の更なる普及・流通を図ってきた。再開した『ちくごアートファーム計画』（2019-20）では将来的に博物館事業に携わるであろう人材や地域と美術館を結ぶことのできるアートマネジメント人材の育成プログラムを行い、文化施設全般の今後の「持続可能性」「発展可能性」を図ってきた。
これらの活動をふまえ、本事業では中国・九州地方で唯一、現代アートのマネジメントに関する専門家・学生を擁する佐賀大学芸術地域デザイン学部と連携しつつ、福岡県立美術館を拠点に将来の博物館業界を支え、地域と美術館を結ぶことのできるアートマネジメント人材の育成に集中的に取り組む。
その際、講座や見学だけのインプットではなく、アーティストや学芸員と実際に展覧会を作り上げて運営していくプロセスを間近に体験させることで、現場のリアリティに基づいた気づきと来場者、社会や地域のニーズを汲み上げ魅力的な展覧会の企画・運営を行う能力を向上させ、実践的かつ効果的な人材育成の場を設ける。</td></tr>
</table>

事業目的	本事業の目的は、博物館をはじめとする文化芸術施設の社会的意義、あるいは文化芸術そのものについて、県民の理解を広く促し、社会における文化芸術の「持続可能性」を底上げすることにある。これまでの成果を活かし、アート事業による地域文化資源を発掘することで地域の文化を活性化するとともに、アートマネジメント人材の育成に取り組み、文化芸術施設の新たな担い手や支持者を増やし、地域における文化芸術活動の拠点としての役割を強化する。福岡県立美術館が核となり、九州芸文館を拠点として文化に関心のある地域住民への情報発信を強化し、また彼らの交流を促す仕組みを作ることによって、より創造的な文化環境作りに取り組む。
事業概要	本実行委員会がこれまで取り組んできた『ちくごアートファーム計画』（2014-16、2019-20 年度）、『CHIKUGO ART POT』（2017-18 年度）では住民参加型の現代アート展を通じて文化土壌の形成および外部関係者との連携を図ってきた。これらの成果をふまえ、以下、本事業では大きく二つの取り組みを行う。 **■美術館と地域を結ぶアートマネジメント人材「アートスタッフ」育成プログラム** 文化芸術事業に将来携わりたいと考えている高大生や、あるいは既に携わっている／今後携わりたい社会人等を対象にアートマネジメント人材「アートスタッフ」育成プログラムを行う。アーティストやアートマネジメントに関わる専門家、学芸員を講師として招聘し、実践例を学ぶ集中講座をオンライン講座で実施する。県内外の実例を学んだ後、福岡県立美術館にて定期的にミーティングを開き、リアルタイムで動く展覧会企画・実施・運営の現場を体験しながら、アートスタッフのアイディアも反映させつつ来場者に向けてのプログラム（解説執筆・ワークシート作成・ギャラリートーク実施・SNS 等での情報発信等）を企画し、会期中実際に取り組む。 **■地域の文化施設や文化振興拠点との連携による現代アート展『ちくごアートファーム計画 2021 はたらくアート』の実施** アートスタッフの活動を反映させながら九州芸文館において美術展を開催する。今回は主として「働く」ということに着目し、各地で来場者や市民を巻き込みながら展開するアートプロジェクト経験の豊富なアーティストを招聘、地域住民が楽しみながら主体的に取り組める事業にする。来場者を日常生活の延長線上にある芸術体験へと誘うことに注力するべく、アートスタッフと協働で制作する来場者プログラム（解説執筆・ワークシート作成・ギャラリートーク実施・SNS での情報発信等）を活用する。また、特設ホームページでアートスタッフ育成プログラムの取り組み等を情報発信し、博物館をはじめとする文化芸術施設の社会的役割について、あるいは文化芸術そのものについて、県民の理解を広く促し、社会における文化芸術の浸透を促す。
実施項目 ・ 実施体系	（１） 地域文化の発信の核となる博物館 □ ア 博物館の情報発信，相互連携 □ イ ユニークベニューの促進 □ ウ 地域のグローバル化拠点としての博物館 □ エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信 （２） あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動 ■ ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成 ■ イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発 ■ ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施

	□　エ　障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業 □　オ　教育委員会と連携した鑑賞教育の実施 （３）　新たな機能を創造する博物館 □　ア　観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動 □　イ　文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発
実施後の 成果・効果等	本事業では、将来の文化芸術事業を担うアートマネジメント人材および文化芸術事業の将来を支える鑑賞者の育成、地域住民とともに文化芸術施設の長期的な「持続可能性」の底上げを目指し、より創造的な文化環境作りに取り組んだ。 アートマネジメント人材の育成では、地域の高大生および社会人を対象にアートスタッフを募集し、展覧会の企画運営のプロセスをリアルタイムに共有、アートスタッフの関心や得意分野も反映させながら展覧会来館者を対象としたプログラムを作成した。協働で制作したプログラムを会期中に実施したことにより、彼らの文化芸術事業への理解および関心を促し、将来、文化芸術事業を担う実践的な人材の育成に取り組むことができた。 「はたらく」ことをテーマに展開した美術展では、アートスタッフたちが自由な発想で企画した鑑賞プログラムにより、来場者の思う「はたらく」をテーマに対話する場を設けるなど、文化施設において地域住民の交流を促す仕組みを作ることに取り組んだ。アートスタッフの取組みを含め、ＳＮＳ等を活用し本事業の取組みを積極的に発信することで、博物館をはじめとする文化芸術施設の社会的役割について、あるいは文化芸術そのものについて、県民の理解を広く促すことができた。

【事業実績】

「はたらく」ことをテーマに、3 人の作家による美術展を九州芸文館で開催し、関連企画では、参加作家や専門家によるトークを実施した。また、アートマネジメントの人材育成として、展覧会アートスタッフを一般から募集し、半年間かけて鑑賞プログラムの企画・準備に取り組み、会期中、アートスタッフによる哲学カフェやギャラリートークなどを実施した。

働くことの歴史を振り返ると、文明の発展や宗教、政治、経済と密接に関わり、その中で働くことの意義や形態は時代によって変化してきた。現代の私たちの働き方は今後どのように変わっていくのだろうか。芸術家の創作活動は仕事？遊び？ そのようなテーマのもと、藤浩志、寺江圭一朗、LICCA の 3 人のアーティストが筑後で作品（Art Work）を展示した。

○<u>美術展</u>

日　程：令和 3 年 12 月 11 日（土）～令和 4 年 1 月 23 日（日）
会　場：九州芸文館
観覧料：無料
参加者：3,422 人
展覧会の感想

・ずっと気になっててやっとこれました！楽しい気持ちになれ又開催してほしいです！！
・展覧会というイメージそのものが、もっと幅広く色んな表現方法があっていいんだなと

感じた展覧会です。新しさとか視点を変えてみるとか、そういった点を振り返ることのできる展覧会でした。

○関連イベント

(1)オープニング・トーク

トーク：寺江圭一朗、LICCA、にしかわしょう子（藤スタジオスタッフ）

日　程：12 月 11 日（土）

会　場：九州芸文館

参加者：32 名

内　容：展覧会初日にアーティストや関係者によるギャラリートークを開催した。藤氏の展示スペースは藤スタジオスタッフのにしかわ氏が紹介し、会場にある素材を使って様々なことにチャレンジできるラボであることや、美術家・藤氏の日頃の活動の様子などが語られた。寺江氏は映像作品がエンドレスであることなどを説明し、ルーティンのように見える人間の労働や生活も繰り返すだけではなく、何かを生み出し、社会へと残そうとする活動につながっているのではないかと語った。LICCA 氏は自身が働かない主義であることに触れ、その考えに至った自身の経歴やそれが今回の作品へと結実するまでの構想について語った。

(2)藤浩志さんによる「しごとはじめのゆるトーク」

トーク：藤浩志、花田伸一、関岡絵梨花

日　程：1 月 4 日（火）

会　場：九州芸文館

参加者：26 名

内　容：藤、花田（本展アドバイザー）、関岡（本展企画者）の 3 人でインタビュー形式のトークを行なった。本展のテーマである「はたらく」こと、藤のこれまでの活動や今回の展示についてなど、トークは様々な話題に及んだ。藤は展示空間を構成する際、特に場や状況が重要であると語り、美術に留まらず、空間や人などのどんなメディアにおいても「何か質が大きく変わる瞬間がある」と、美術の核心ともなる部分に触れた。終盤は参加者の質問や感想を聞きながらトークを展開するなど、参加者との交流も行われた。その他、別日には糸島在住のパフォーマー・花名 カイ ジョーンズさんがパフォーマンスを行うなど、様々なことに挑戦できる《チャレンジラボ》として開かれた。

(3)はたらくトーク シリーズ 1：名もなき人々のはたらきについて

登壇者：上野千鶴子（社会学者／東京大学名誉教授）

日　程：1 月 9 日（日）

会　場：オンライン中継にて配信

参加者：173 名（オンライン参加）

内　容：上野氏の提案で関岡（本展企画者）も加わり、ジェンダー研究のパイオニアとして知られる上野氏に社会学者として長年研究してきた主婦や介護の労働について語っていただいた。

シャドーワーク（見えない仕事、無報酬でやってきた労働）とも呼ばれる主婦の家事・育児・介護・看護・介助などは仕事ではないのか？　ということを皮切りに、ケア労働者の低賃金や非正規雇用女性の労働にコロナが与えた影響、正規雇用女性の家事を含む長時間労働など、女性たちを取り巻く労働問題に鋭く切り込むトークとなった。話を聞いた参加者から「理不尽に低賃金で雇われているのに、そのことに対して怒りの気持ちを持たない人が多いのではないか？」という問いに対し、別の参加者から「怒りの気持ちは持っているが、必死に押し殺しているのだと思う」といったコメントが返されるなど、オンライン上での対話が生まれていた。

(4)はたらくトーク　シリーズ2：はたらく歴史と別視点から考える「はたらく（生きる）」について
登壇者：水町勇一郎（法学者／東京大学社会科学研究所教授）、森元斎（哲学者／長崎大学多文化社会学部准教授）
司　会：花田伸一（本展アドバイザー／キュレーター・佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）
日　程：1月10日（月・祝）
会　場：教室工房3・4、オンライン中継にて配信
参加者：39名（うち20名は現地参加、19名はオンライン参加）
内　容：前半は水町氏と森氏のそれぞれに講義を行なってもらった。水町氏は世界や日本の働く歴史を例に、我々が抱く労働観は歴史や宗教といった思想から形づくられ、現代の働き方へとつながっていることを紹介した。一方、森氏は働くことについて哲学思想から紐解き、国内外で起こった市民やアナキストの活動を紹介しながら資本主義社会の在り方に目を向け、それ以前の働き方であった「働く時に働き、働きたくない時には働かない」というシンプルかつナチュラルな生活について提言した。
後半は司会に花田氏を迎え、会場やオンライン参加者から届いた質問や相談に回答していただきながら、自身の「はたらく」ことに対する考え方などを語っていただき、一人ひとりの認識や現状を交換し合う機会となった。トークはコロナ禍での開催であったため、現地参加は人数を限定して行い、オンラインで配信した。

○<u>アートスタッフによる鑑賞プログラム</u>
(1)「はたらく哲学カフェ」
ゲスト：古賀徹（哲学者／九州大学芸術工学研究院教授）
日　程：1月8日（土）
会　場：九州芸文館
参加者：24名
内　容：「はたらく」ことをテーマに様々な人が語る場を設け、対話する時間を作りたいと考えたアートスタッフが発案した。ゲストへのオファーに始まり、チラシの作成、広報、当日に向けた準備やリハーサルなど、ゲストの古賀氏にも協力いただきながらアートスタッフ同士が連携して進めていった。
当日は様々なバックグランドを持つ老若男女が参加し、あたたかい八女茶やコーヒーを飲みながら「はたらく」ことに対する価値観を語り合い、共感し、相違を認め合うなど、実り多い議論となったようだ。アートスタッフたちはプログラムの企画・運営までをやり遂げた。

(2)「はたらくギャラリーツアー」

日　程：1 月 10 日（月・祝）、16 日（日）
会　場：展覧会場
参加者：のべ 26 名
内　容：アートスタッフが参加作家を分担しながら、作品の見どころや本展について紹介した。参加型の作品については参加者に体験を促し、質問を交えながら進めるなど、対話型のギャラリートークに挑戦した。参加者に声をかけるタイミングや場所などは事前にリハーサルを行い、アートスタッフ同士で改善点を話し合いながら本番に臨んだ。

(3)「はたらく SNS」
内　容：令和 3 年 11 月からアートスタッフが運営するＳＮＳアカウント（Instagram、Twitter）を作り、アートスタッフの活動はもちろん、本展や九州芸文館の周辺情報などを発信した。来場者やプログラム参加者の声なども紹介し、現場の様子を伝え続けた。

(4)「はたらくインタビュー」
日　程：1 月 10 日（月・祝）、16 日（日）
会　場：展覧会場
内　容：会期中、アートスタッフが来場者や「はたらく哲学カフェ」の参加者にインタビューを行った。また、展覧会入り口にアンケートを設置するなどして、来場者の声を集めた。

(5)ワークシート「はたらくガイド」
日　程：12 月 11 日（土）～1 月 23 日（日）
会　場：九州芸文館
内　容：アートスタッフが考案したワークシートを会場で配布し、来場者に体験してもらった。子ども用と大人用で言葉の選び方を変え、子ども用には漢字にルビを打つなど、体験する対象を想定したワークシートづくりに取り組んだ。質問は展示作品に関することや、本展のテーマに引き寄せた「「はたらく」ってどんなことだと感じた？」といった問いかけを行い、ある子どもからは「自由に好きなことをする！」といった回答が寄せられた。参加者は子どもが多かったが、親子で一緒に参加する来場者の姿も見受けられた。

(6)社員証、給与明細、名刺、シールなど「はたらくグッズ」制作
日　程：12 月 11 日（土）～1 月 23 日（日）
会　場：九州芸文館
内　容：来場者に「はたらく」ことについてより深く思いを巡らせてもらうべく、「はたらくアートカンパニー」の社員証（裏面には会場での過ごし方なども表記）や、解説を記載した給与明細、本展を SNS 投稿した人に「あしたからはたらくひと」「ばりばりはたらくひと」などと記した名刺を社員の一員として配布した。また、ワークシートやアンケートに参加した人には賞与としてシールを配るなど、様々なグッズを活用した。アイディア出しや制作内容の検討については、アートスタッフや佐賀大学芸術地域デザイン学部阿部ゼミ有志の学生と共同して行った。

会場スタッフの感想

・特に入口で渡すかわいい社員証には、ほとんどの子供が「わーい」と喜び、大人はユニークさに笑顔になっていました。SNS 投稿の際に渡している名刺も、枚数制限にどれにしようかと悩みながら選ぶ人の姿もありました。

○アートスタッフ育成プログラム

日　時：①７月 17 日（土）、②７月 24 日（土）、③8 月 8 日（土）④8 月 28 日（土）～29 日（日）、⑤9 月 5 日（日）、⑥9 月 26 日（日）、⑦10 月 10 日（日）、⑧10 月 24 日（日）、⑨11 月 6 日（土）、⑩11 月 14 日（日）、⑪11 月 28 日（日）、⑫12 月 3 日（金）～10 日（金）

会　場：福岡県立美術館、九州芸文館

参加者：8 人

内　容：地域の芸術文化を担うアートマネージメント人材育成として、アートスタッフを一般から公募し、半年間かけて鑑賞プログラムの企画・準備に取り組んでもらった。公募の結果、大学生・大学院生、社会人の計８名が参加。アートスタッフたちは福岡県立美術館での鑑賞プログラムや、本展参加作家のトークから各々の視点で自由な発想を得て、ギャラリートークや哲学カフェ、ワークシートの作成、参加作家へのインタビューなど来場者向け鑑賞プログラムの企画・実施に取り組んだ。

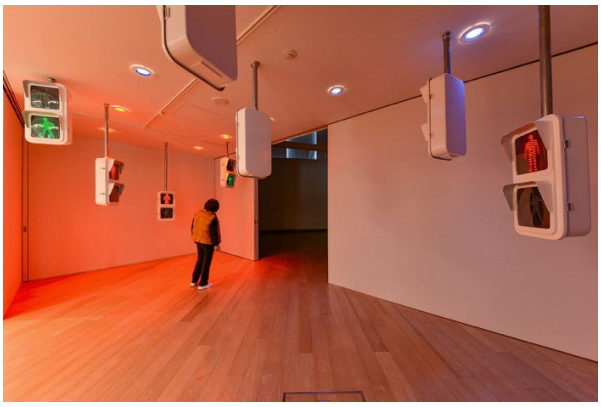
アートスタッフコメント：

・「はたらくアート」というテーマに興味を持ちスタッフとして参加しました。作家インタビューやワークシート作成では、作家それぞれで異なるテーマの捉え方の面白さ、また鑑賞者に寄りそうプログラムを作ることの難しさに気づきました。

・この活動を通じて、普通学生では体験できないようなことに取り組むことができました。大学で学んだことを同時に実践して、授業だけではわからない難しさや楽しさを知りました。私が体験したのは実際の学芸員の仕事のほんの一部ではありますが、この経験を生かしてこれからも芸術への学びを深めていきたいです。

・半年間の講座の中で、作家との交流と鑑賞プログラムの実践を通して、作品の理念だけではなく、参加者たちの声も聞けるのが面白くて、はたらくについても考え直しました。

展覧会場（九州芸文館）



展覧会場（九州芸文館）

展覧会場（九州芸文館）

オープニングトーク

藤浩志さんによる「しごとはじめのゆるトーク」

はたらくトーク　シリーズ１

はたらくトーク　シリーズ２

アートスタッフによる「はたらく哲学カフェ」

アートスタッフによるギャラリートーク

アートスタッフによる「はたらくインタビュー」

アートスタッフ育成プログラム

アートスタッフ育成プログラム

参加作家へのインタビュー

展覧会場設営補助

〇ちくごアートファーム計画 2021 はたらくアート特設サイト（http://hataraku.works）